

寂嚴和上の眼差し

漢詩集『松石餘稿』訳注の紹介

西口 芳男



A5判 432頁
宝嶋寺寂嚴顕彰会
[本体 5,000円 + 税]

宝嶋寺古文書研究会読解／下定雅弘監修
寂嚴和上漢詩集
松石餘稿訳注

備中連島（岡山県倉敷市）矢上山宝島寺（真言宗御室派）沙門寂嚴（一七〇二～七二）の漢詩集『松石餘稿』訳註卷頭の寂嚴和上頂相を見た者は、その面貌の怪異さに驚嘆するであろう。それは悉曇学の師である曇寂和上の端整できりりと締まつた頂相が並載されることから、いつそうきわだつている。『続日本高僧伝』は「状貌怪異、頂相隆起、両牙向上、棗顔雪眉、恰如応真」〔面貌は奇妙、頭頂が盛り上り、牙のようになに歯が二本上に出、棗のように皺があつて赤っぽく、眉はまつ白、まるで羅漢のようだ〕と表現している。しかし、目もとをよく見ると、その眼差しはやさしい。その眼差しのように、寂嚴は詩に詠ずる対象（人であれ物であれ風景であれ）に対して常に慈愛に満ちたやしさがある。

備中足守藩木下家の藩士岩田氏出身の寂嚴は、賀陽郡宮内

の普賢院（超染和上について一歳剃髪）、窪屋郡沖村の円福寺（一九歳住持）、浅口郡連島の宝島寺（四〇歳住持）、倉敷村金鶏山玉泉寺（六六歳隠退）七〇歳示寂）を拠点に、悉曇学者、また能書家として活躍した江戸中期の真言僧である。書家としての寂嚴は著名であり、最近では石川九揚氏が、明和五年に杜甫の飲中八仙歌を書いた書に対して「曲直の対位から成る構成は近代性すら感じさせる。この人工的、作為的な表現は、元禄時代の科学的思考法を寂嚴が共有していたからであるとも考えられる」と評している（『日本書史』名古屋大学出版会、平成一三年）。しかし、能書家である前に、寂嚴は悉曇学の学僧であり、『梵字悉曇章稽古録』など、悉曇学の著作を出版し、各地で悉曇についての講演を行つていた。

されてきた悉曇・梵語の資料を収集し、七部門に類別した『梵学津梁』千巻を編纂しており、その業績は高く評価されている。しかし、江戸時代の悉曇学についての研究は、ほとんど手つかずで、寂厳の悉曇学にもスポットが当たることがなかった。そうしたなか、平成二一年九月二〇・二一日の両日、学僧としての寂嚴を顕彰するシンポジウム「学僧寂嚴とその時代」が宝島寺で開かれた。主宰者の竹内信夫（東大教授）は、寂嚴の背後には、新しい学問の鬱勃たる蠢きが存在、その時代の精神を過剰なまでにわがものとし表現し得た人であり、悉曇学史に狭く限つてみても、空海の「声明業」への大胆な回帰という戦略で批判的に乗り越え、外国語へと架橋した先進的研究者であった、といいう（『学僧寂嚴とその時代』『宝島寺所蔵の寂嚴悉曇学資料に関する総合的研究』平成二二年五月）。

宝島寺において寂嚴顕彰会が発足したのは昭和五三年、つづいて宝島寺古文書研究会が立ち上げられ、寂嚴関係資料の解説と研究が進められてきた。その成果はすでに『寂嚴和上資料集』第一～四集、『寂嚴和上著作集』第一集・第二集として発行されており、上記のシンポジウムもそうした活動の成果があつてのことであつた。

寂嚴の漢詩集『松石餘稿』を翻刻して初めて紹介したのは、寂嚴の評伝として唯一のものである渡辺知水『僧寂嚴』（昭

和八年、温古会、昭和五四年復刻、寂嚴顕彰会）である。宝島寺古文書研究会では、漢詩を読解すべく三〇数年の精進を重ね、その注解が記録されてきたが、中国文学学者で岡山大学名誉教授の下定雅弘氏との勝縁によって刊行がなったのである。出逢いのきっかけは、教え子の岡山の家に所蔵されていた寂嚴の書を解説したことであつたと聞いている。

松石は宝島寺内にある寂嚴の居室の亭号であり、今も現存している。『松石餘稿』は文集と漢詩集の二巻に分かれ、共に寂嚴親筆の書跡が遺存している。文集はすでに『寂嚴和上資料集』第二集で解説されており、そこに「松石亭記」が存在する。

詩の总数は一〇五首、訳注は原文・訓読・詩体解説・題意・現代語訳・語釈からなり、必要に応じて校注と補説が付き、詩の参考資料として三篇の散文、及び附録として「刊行田孟儼先生画譜序」（巻末に書影）の訳注を収載している。

詩集は生涯に亘つて加除訂正が加えられおり、本文を見だすのに困難を極めた（哲定師「あとがき」といわれている。下定氏が参加することで目途がたつたのであろう。底本である親筆の書影が巻末に影印されており、つぶさに見られて興味深い。校注はその加除訂正や『僧寂嚴』翻刻本との異同を拾つていて。詩体解説では、古文書研究会の長年の平仄にか

かわる疑問に丁寧に答えられており、律詩の平仄を完璧にマスターしていた寂嚴が平仄をハズス意図が説明され、一般的な漢詩訳注本には見えない特色である。また「仏教用語解説」が付され、仏教・密教になじみのない人にも読みやすいように配慮されている。

「如水如雲海上山、年年相迎望檐間。春風一夜過前野、殘雨猶暝失舊顏。」^{〔水〕}なか雲なか分かちがたい海上の山、来る年も来る年も檐の間から望んでいる。春風がある夜、吹きつけて前の野原をよぎつた、雨がまだ残つていて暗く本来の姿を見せてくれない。」

「円福寺雜詠」十首之第七「南海峰」と題された七絶であり、円福寺から望まれる四国を詠じたもの。二九歳のときに撰した「円福寺記」にいう、

ここに言われる「三密神変、触目無礙」は、目に見える万象は大日如来（法身）の営みである、ということだろう。だとすれば、寂嚴が見ているものは単なる外境ではない。だからなのか、寂嚴が詩に詠ずる対象（人であれ物であれ風景であれ）に対して、その眼差しは常にやさしい。

「雖狭、景光廓眼、氣象更幽、吟興盪胸。苑春花莊嚴曼荼之海會、牕秋月表章質多之圓明。三密神變、觸目無礙。十喻妙觀、凝心任運。但是非常情所測、隨其機見、幽顯不齊者也。〔寺域は狭いが、日の光が目の前に開け、景色はいつそう静かで美しく、詩興が胸に湧き起ころ。苑の

「春盡藏來麥龍違、老婆炊飯話糟糠。野烟靄靄半村沒、零落生涯異香。」春が尽きる時燕が飛んできて麦畑は収穫にあわただしい。老婆がご飯を焼き粗末な食事について話している。満ちわたる炊事の煙で村の半ばが隠れんばかり、寂しい暮らしの中で常にはない濃い香りを嗅ぐ。」

これも「円福寺雜詠」の「田家烟」と題する七絶。住持して一年後の辛丑秋閏七月望日、車軸のごとく雨が何日も降りつづき、大洪水に見舞われる。『中州町誌』によれば、死者四三人、流れた家は一八〇軒、壊れた家は九〇〇余軒。「吾れ睹るに

忍びずして、身を畚鉢に委ぬ。沙石を發し、泥沼を墾し、功歳月を累ね、漸く菽麦を種うるに耐ゆ」（円福寺寺記）。こうしてやつと収穫できるようなつた村民の喜びを、自らの喜びとしてしみじみと詠じている。

三四歳のとき畿内に遊学したときのものと推測される、「浪速に円珠庵を訪ひ遇わず、戯れに題して去る」と題する、擁体七絶がある。

「日出三竿駒似刪、出門又若崩于山。懶慵惡乎無所拘、寧孰世間迎送姦。」（日はもう高く昇っているのに、まるで板でも削つていいような駒が迎えてくれた。これではとても会えないと門を出たが、それでもまだ山を崩すようなものすごい音が追つて来る。ああ、なんというなまけものだ、誰も気をつけてあげる人はいないのだろうか。しかし、世間の送迎が上辺のみかしましく寒意がないのと比べて、どちらが優つているだろうか。）

ここにも詠ずる対象に対するやさしい眼差しがある。だからこそ、このようにユーモアと機知に満ちた作品が生まれるのはないだろうか。

下定「まえがき」は寂嚴詩について、「配列の基準は、わかい円福寺時代のものから晩年のものへと、大きく時代別に分けた上で、花木を詠じたもの、送別・留別の作など、ゆるやかにまとめたもの」、「内容は何よりも、真言密教の修行者としての自分の歩みを書きとめようとしたもの」、「ほとんどが喜び・樂しみを詠じたもので、悲哀を詠う詩はごく僅かしかなく、何を対象にし、何を主題にしようが、愛に満ちている」とまとめている。

地元の方々によつて結成された宝島寺古文書研究会の四〇年近くにわたる寂嚴関係資料の解説・刊行は、悉曇関係の資料を除いて、本訳注の刊行をもつて一応の区切りがつけられたのである。それは寂嚴和尚への敬慕の念が半端なものでないことを証明するものであり、関係者の方々のたゆまぬ精進に敬意を表すものです。

（にしぐち・よしお 禅文化研究所主任研究員）